

道内の医療現場で仮想現実（バーチャルリアリティー、VR）の活用が広がっている。けがや病気で失われた身体の感覚の回復に役立つりハビリのほか、嘔吐恐怖症といった不安障害（精神疾患）の治療など、幅広い分野で効果が確認されている。

リハビリ、不安障害の治療で効果

「できた！」
「上手ですね」

札幌中央病院（中央区）

で9月、リハビリをしていた女性（74）は、理学療法士に声を掛けられると笑顔を見せた。VR用のゴーグルを着けた女性の視界には、左右に次々円が現れ、両手に持つコントローラーを近づけると「ピコン」と音が鳴り「あっぱれ」と表示された。

女性は昨年9月に脳梗塞を発症、今年6月には心全となり、入院していた。手足の筋力が弱り歩行が不安定になっていたが、通常の歩行訓練と、体幹やバランス感覚の回復に効果があるVRを使つたりハビリを続け、「歩けるようになっ

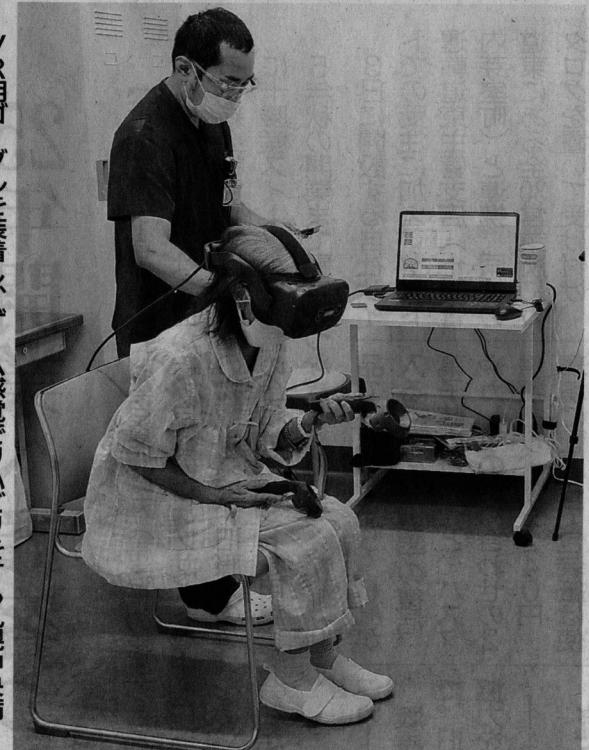
てきて効果を感じる」と涙をにじませた。

同院は8月、リハビリ用の医療機器「med-iVRカグラ」を導入。5種類のメニューがあり、けがや病気による歩行機能や認知機能の改善に効果があるときれる。リハビリは1回当たり10～15分で、これまで入院、通院患者30人ほどが週1回毎日体験した。他の

基本プログラムと一緒に保険適用で受けられる。

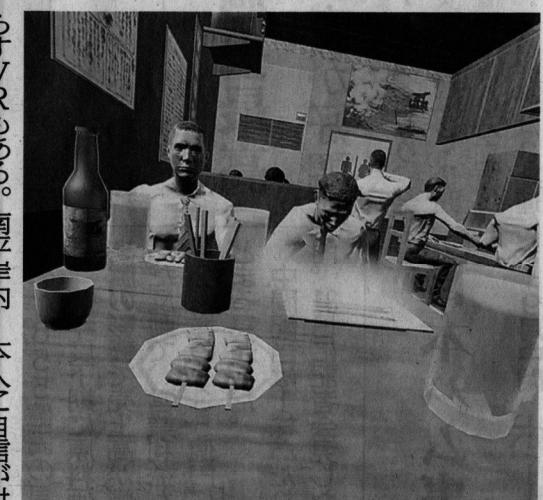
同院リハビリーション科長で理学療法士の伊藤崇倫さん（39）は「歩く速度が上がり、歩行時の方向転換のバランスが良くなるなど効果のある方が多い」と話す。

患者の内面に変化をもたら



VR用ゴーグルを装着し、ゲーム感覚でリハビリをする札幌中央病院の入院患者（中村祐子撮影）

どこでも同じ質 少人数で提供可能



南平岸内科クリニックが制作したVR。嘔吐恐怖症の場合、画面内の人方が気持ち悪そうな不快感をもたらす。

うすVRもある。南平岸内科クリニック（札幌市豊平区）は一昨年、独自にVRを制作。自分や他人が嘔吐することなどに恐怖や苦痛を感じる「嘔吐恐怖症」と、人と食事をすることに強い不安や緊張を感じる「会食恐怖症」の治療に活用する。

VRでは居酒屋、病院、学校などの場面や、相手を1人や大勢に設定できる。体験者は3週間ほどで替えを自力でできるようなりたり、精神的に安定化するなどの変化が見られる。北海道文教大（函館市）と連携して症例を試験的に実施している。

体験者は3週間ほどで替えを自力でできるようなりたり、精神的に安定化するなどの変化が見られる。北海道文教大（函館市）と連携して症例を試験的に実施している。

野呂浩史院長は「苦手な物に実際に向き合うには、VRがないとなかなか難しい。VRを使うことで患者

治療は1回最低20分以上。臨床心理士らが付き添い、患者の不安の度合いに合わせて場面を設定する。保険適用の診察料約1200円を基本に、時間や重症度などに応じて料金を加算する。高恐怖症など他のVR治療を含めてこれまで約120人が体験した。

野呂浩史院長は「苦手な物に実際に向き合うには、VRがないとなかなか難しい。VRを使うことで患者

が変わっている。けがや病気で失われた身体の感覚の回復に役立つりハビリのほか、嘔吐恐怖症といった不安障害（精神疾患）の治療など、幅広い分野で効果が確認されている。

それでも自信が付くなら幸い」と語る。

米グーグルのストリービューを使うところも。川病院（石狩市）では、知症患者が専用ゴーグル着け、ストリートビュー生まれ育った街やなじみある風景を眺めてもらっている。

脳の活性化を図るリハビリを試験的に実施している。

北海道大学大学院保健学研究院准教授の寒川美さん（54）＝スポーツ理学法＝によると、VRは年から医療現場で活用されるようになった。寒川さんは「VRを使うと、どう

ない施設でも、リハビリを提供できるのが大きな利点。スタッフの人数の引き出しが増える。活動によって質が同じ治療やり方も変わらなくなったりする。それでも自信が付くなら幸い」と語る。